

日本

貿易統計 (2020年7月)

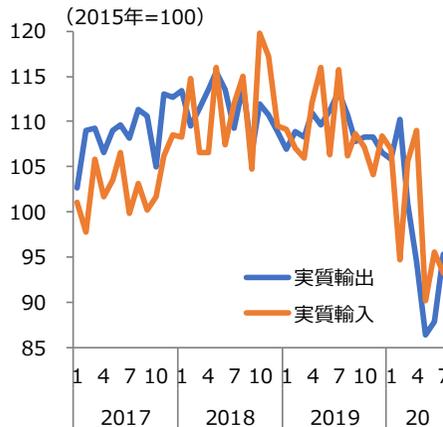
輸出は米国向けを中心に持ち直しも低水準

政策・経済研究センター

綿谷謙吾

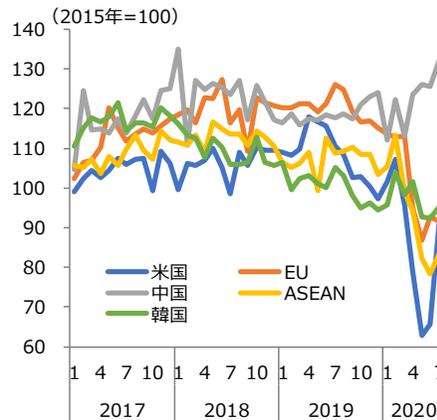
03-6858-2717

1 実質輸出入



注：当社による季節調整値。20年1月以前のEUの値は、EUから英国を除いた値。
出所：財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」より三菱総合研究所作成

2 実質輸出：国別

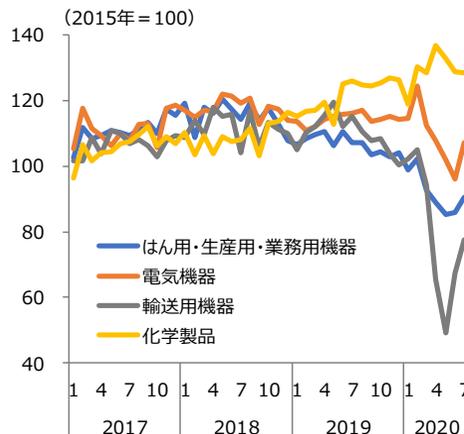


評価ポイント

今回の結果

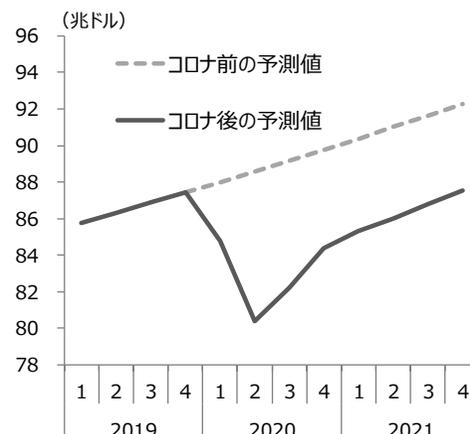
- 20年7月の実質輸出（当社による季節調整値）は、前月比+8.6%、実質輸入は、同▲2.5%（図1）。貿易収支（季節調整値）は、▲348億円。輸出は海外の経済活動再開により、2カ月連続で増加も、依然として低水準にある。
- 実質輸出（当社による季節調整値）を国・地域別で見ると、米国向けが前月比+39.4%と大幅に増加した（図2）。特に輸送用機器が同+101.1%と2カ月連続で増加。米国向け輸出持ち直しの背景には、経済活動の再開がある。ただし、米国向け輸出は、コロナ前（19年末）の水準を下回っており、本格回復したわけではない。一方、他国と比較し経済活動を早期に再開した中国向け（同+5.3%）は増加傾向にあり、コロナ前の水準を上回っている。
- 品目別では、輸送用機器が前月比+15.2%の2カ月連続の増加（図表3）。輸送用機器は米国向け輸出を中心に増加したが、コロナ前の水準を2割下回っている。はん用・生産用・業務用機器や電気機器も増加したが、コロナ前の水準まで回復はしていない。

3 実質輸出：品目別



注：当社による季節調整値。
出所：財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」より三菱総合研究所作成

4 実質GDP（世界計、MRI推計）



注：コロナ後の予測値は、ロックダウンのような厳格な防疫措置は回避も、感染リスクの高い地域や活動への重点規制と緩和を繰り返しながら、21年末にかけて一定の防疫措置の継続を前提とした推計。
出所：三菱総合研究所作成

基調判断と今後の流れ

- 輸出は、国内外の経済活動再開にあわせ持ち直しつつあるが、新型コロナウイルス感染症拡大による海外需要の縮小から、低水準にとどまっている。
- 先行きも、低水準での推移を予想する。20年4-6月期は多くの国が大幅なマイナス成長となったが、4月をボトムに経済活動は再開しており、輸出は持ち直している。ただし、当社の試算では、世界のGDPがコロナ前（19年末）の水準まで回復するのは21年末を見込んでおり、海外需要が縮小した状況は続く（図表4）。経済活動が早期に再開した中国は、20年内に回復するとみられるが、欧米がコロナ前の水準に回復するのは22年末以降とみている。感染拡大が継続している状況では、海外需要の本格回復は見込みにくい。また、国内でも、感染者数が増加しており、生産活動の制約要因となる可能性がある。供給面でも輸出の回復には時間が必要だ。
- さらなる下振れリスク要因は、国内外での経済活動抑制の長期化だ。感染は依然として拡大しており、国内外では一部経済活動の自粛を要請する動きが続いている。このような状況が継続すれば、海外需要の縮小、国内外の生産・物流が停滞し、輸出の停滞はさらに長期化するだろう。